

4月27日 住吉区小学校校長会



住吉区では、災害時に迅速かつ有効に行政が機能するよう、日頃から各学校との連携を密にしています。この日は、住吉区内の各小学校校長が集まる校長会に参加し、災害時に迅速な情報連携が可能になるよう、協力を依頼しました。

消防吏員の経験を活かして
消防吏員としての知見と区役所が保有する情報をふまえ、地域のニーズも探りながら、市民の皆さまと防災行政をつなぐべく活動しています。

4月28日 地域振興会女性部研修会



住吉区民ホールで行われた地域振興会女性部研修会（参加者約300名）にて、地域の女性部の皆さまへ向けて防災担当係長着任のご挨拶を行い、区役所の防災担当としての意気込みなどを語りました。緊急消防援助隊や過去に経験した災害現場を話題にしたときに、聴衆の皆さまの表情が真剣になる場面がありました。過去の災害を振り返り、防災について考えるこのような時間の積み重ねが、地域の防災力向上につながると強く感じました。

5月12日 住吉区役所備蓄倉庫



住吉区役所庁舎内には、災害発生時に区内各避難所へ届けるための物資を保管している備蓄倉庫があります。日頃からこまめに管理を行うのも地域課防災担当職員の任務の一つで、この日は私も初めて物資の確認を行いました。今年度は災害時用医薬品の有効確保として、ローリングストック等様々な手段を検討中です。消防吏員として被災地や災害現場での経験を活かし、より現場の実情に即した物資の確保を目指していきます。

5月10日 地域の防災訓練



清水丘3丁目北町会が主催する災害避難訓練に、住吉消防署・住吉警察署とともに参加しました。この訓練では、住吉消防署員による救助資器材（油圧ジャッキ）を用いた救助訓練の他、心肺蘇生訓練が行われました。主催者との事前打合せでは、地域のニーズを調査したうえで実現可能な訓練を検討。これをふまえて消防署と調整し、訓練当日は、地域に保管している救助資器材の場所や保管手法を整理し、全戸配布している住吉区防災マップを用いて説明しました。

派遣者に 聞きました!!

大阪市消防局から他部局等に派遣されている職員に、新しい職場での様子や派遣先での取組などをレポートしていただくコーナーです。



住吉区役所 地域課担当係長
若松 翔

この春から、地域課防災担当として、住吉区役所で勤務している若松です。ここでは、自身の新たな職務とともに、住吉区における地域防災力の向上を目指す取組についてご報告します。

住吉区が進める「企業連携」

大阪市では、企業等とのマルチパートナーシップにより、活力ある地域社会づくりを目指していますが、なかでも住吉区は防災力の向上に力を入れており、民間企業と連携することで、具体的な取組を進めています。

その中核となっているのが、災害時における連携協定事業です。令和8年4月に締結した連携協定では、災害発生時に食料・生活物資等の提供協力に加えて、帰宅困難者に対するトイレ・水道水・滞在場所の提供といったご支援を得ることも可能になり、防災力アップの切り札の一つとなっています。

また、区のウェブサイト等で「災害時地域協力事業所」も募集しており、資材・重機車両の提供や、災害対策に必要な人材派遣などのご支援をいただけるよう、約50社の事業所にご登録いただいています。

4月23日 協定締結式



災害時における防災活動協力に関する協定を締結したイオンタウン株式会社及び株式会社ダイエーとの協定締結式に臨みました。本協定締結に際し、協定相手先との調整や締結式の円滑な進行に努めました。まずは、企業連携することで何かが改善されるのか、課題解決に向けて検討したうえで企業側へアプローチ。その後、協定内容の打合せを行い、総務局におけるリスク審査後、詳細の調整、報道発表に向けた準備、協定書作成の準備等を行いました。

4月22日 企業との意見交換



昨年度、避難所運営支援に関する連携協定を締結した東洋テック株式会社との会合が行われ、地域課防災担当着任のご挨拶で訪問し、意見交換を行いました。同社は、警備やビルメンテナンスを主力事業として、実績を重ねてきた企業です。被災地における犯罪が増加傾向にあり、対策が求められている昨今、安全・安心な避難所運営に貢献することが期待されています。

共に学び 共に成長

皆さん、内外部を問わず様々な研修を受講されるかと思いますが、研修で得た知識を自分だけのものになっているのがもったいないと感じたことはありませんか？
このコーナーは、研修受講者が研修の良かった点や他の人に伝えたいと感じたことを紹介し、皆さんと共有するコーナーです。共に学び共に成長しましょう！



住吉消防署 救助担当司令
中島 明彦

第8回 令和7年度 総合教育「幹部科」(総務省消防庁消防大学校)

はじめに

消防大学校に入校し、令和7年度総合教育「幹部科」を受講しました。これは「消防に関する高度の知識及び技術を総合的に修得させ、消防の上級幹部たるに相応しい人材を育成する」ことを目的とするものです。ここでは、その事前教育及び消防大学校での学びや経験などをお伝えします。

eラーニングによる「事前教育」

消防大学校入校に先立ち、事前教育として26コースの必須項目(約42時間)及び35コースの任意科目を、eラーニングで受講しました(令和7年10月1日から令和8年1月13日)。
その内容は「接遇研修」「教育技法」「人間科学と動機付け」「危機管理」など多分野にわたるもので、大学教授や民間の専門家が講師を務める、非常に充実したものでした。また、eラーニングでの学習環境であることから、進捗管理を行いやすかったことにも助けられました。

寮生活をしながら学んだ「集合研修」

消防大学校に入校し、寮生活をしながらの集合研修は、令和8年1月26日から3月6日までの40日間(うち教育日数は33日間)行われました。
計226時間に及ぶその内容は、「消防庁上級幹部の講話」「消防行政」「消防実務管理」「消防実務法規」「伝承講話」「危機管理」「指揮訓練」「班

単位での課題研究」「報道対応」など、多種多様な分野にわたるものでした。それらのなかから、特に印象深かった講義についてまとめます。

■リーダーに求められる「7つの要素」

消防大学校副校長の日高氏(現東京消防庁蒲田消防署長)による講話で紹介されたのが、リーダーに求められる「7つの要素」でした。

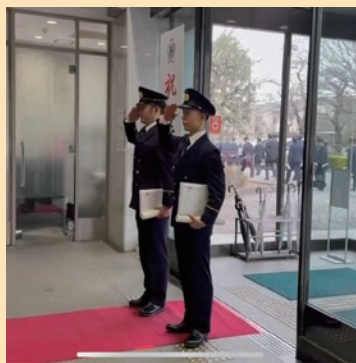
講和では、「傾聴」「視点」「チームワーク」「志」「勇気づけ」「自己実現の基盤を整える」「心理的安全性の確保」それぞれについて、具体例を挙げながらその重要性が説明されました。

上司であれ部下であれ、相互に努力しながら敬意を持ってより良い人間関係を構築し、明るい職場づくりを心掛けることが大切です。さらに、自分の意見や気持ちを安心して発言できる状態、いわゆる「心理的安全性の確保」を確立することで、健全な意見の衝突が促されることになります。

意見が聞き入れられない職場で、エンゲージメント(所属する組織の愛着の度合い)を高めることは難しいものです。後輩や部下が「指示がわかりません、もう一度教えてください」と質問できる雰囲気を作り、生産性の高い職場づくりを意識する必要があることを再確認した講義でした。

■経験のみに頼らない「教育技法」

「教育は科学である、経験のみに頼った教育は必ずしも良い教育とはいえない」。これは、山崎



卒業式セレモニー (副総代とともに)

とや、他科の受講生と寮生活の調整をすることでした。意見のとりまとめや入校式の宣誓、卒業式の答辞、イベント毎に受講生を代表して発言を求められることもありました。

受講生一人ひとりと真摯な対応を積み重ねる過程で、幹部科全体が、ひたむきな姿勢で学習に取り組む一つの集団へと変化していきました。このような素晴らしい経験を与えてくださった大阪市消防局に感謝しながら、本研修で学んだこと、経験したことを、精一杯、業務を通して大阪市消防局に還元したいと考えています。

消防大学校に入校し、所属や家族と離れて生活しながら学ぶことは、決して簡単なことではありませんし、大きなハードルがあると感じる方もおられると思います。ですが、このハードルを乗り越えた先に大きな感動があり、私自身、より一層大阪市消防局の一員であることに誇りを持つことができました。組織のエンゲージメントアップを目指して、皆様もぜひ消防大学校へ!!

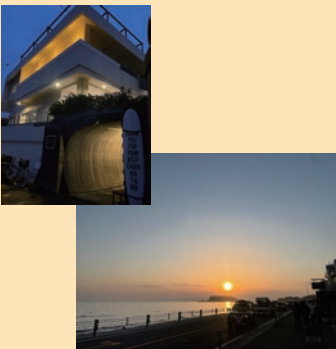


ディベート講義

肯定側と否定側に分かれて討論しました。反対側を言い負かすのではなく、様々な角度から事象をとらえ、より良い方向に導いていく習慣が身につきました。

楽しかった！休日の過ごし方

消防大学校(東京都調布市)の最寄り駅「JR吉祥寺駅」は、渋谷まで17分、新宿まで12分。交通の利便性が高いうえに、商業施設だけではなく公園などの自然環境にも恵まれ、ジブリの森公園や井の頭公園周辺には、雰囲気の良いカフェや飲食店がいくつもありました。吉祥寺エリアが「東



葉山のレストラン(左上)と
江の島に沈む湘南の夕陽

おわりに

今回の研修では、僭越ながら総代を務めさせていただきました。平均年齢におよばず、私よりも階級上位者がおられるなか大変恐縮ではありましたが、素晴らしい経験となりました。

総代の主な役割の一つは、担当教官と受講生との連携を円滑にし、充実した教育環境を整えるこ

「情報統括支援車」（消防庁無償使用車両）



情報統括支援車



後部座席上部にはエアコンが装備、後部座席前方には収納可能なテーブルが設置されており、被災地への進出中からパソコンを使用して被害状況や活動情報を収集することが可能です。

さらに、車両の後部にはパワーリフト装置が装備されており、デジタル作戦卓や大型モニターといった重量物の積み下ろしを、安全かつ効率的に行うことも可能です。

- 【車両表記】 CC10
- 【無線呼出名称】 大消統括 10
- 【駆動方式】 4輪駆動（4WD）
- 【乗車定員】 5名
（前方2名、後方3名）
- 【配置場所】 大阪市消防局
- 【積載資器材（消防庁無償貸与）】 デジタル作戦卓、大型モニター、ノートパソコン、タブレット、大型プリンター他



「情報統括支援車」の資器材(消防庁無償貸与)

デジタル作戦卓

現場の指揮・統制や情報共有を効率的に行うためのデジタル支援ツール。(80 cm × 140 cm。タッチパネル方式。タッチペン対応。)

ホワイトボードや紙地図を用いた情報管理手段に加えることで指揮支援体制の強化を図ります。

活用例

- ・活動方針を立案し、大型ディスプレイを活用して電子地図上で部隊の展開図を作成。活動エリアや危険区域を書き込んだ後、共有サーバーによる全体への共有も可能。
- ・現場活動中の各部隊がタブレット等で撮影した写真や動画をアップロードすると、デジタル作戦卓に即時反映される。リアルタイムで共有可能。

その他の資器材



大型モニター
(70 cm × 120 cm。タッチパネル方式。)



ノートパソコン



タブレット



大型プリンター

情報統括支援隊の今後

近年、全国各地で大規模災害が激甚化・頻発化しており、能登半島地震や奥能登豪雨、さらには岩手県で発生した大規模な山林火災など多様な災害が相次ぐ中、緊急消防援助隊には、より一層の高い対応力が求められています。

今後、情報統括支援隊出動時は統括指揮支援隊と緊密に連携しながら、指揮支援体制の強化を図ることが重要な任務となります。

その期待に応えることができるよう、DX資器材の取扱い等、日々研鑽してまいります。

緊急消防援助隊 NEWS

「情報統括支援隊」が創設されました！

令和7年3月、総務省消防庁の通知により、「情報統括支援隊」、「安全管理部隊」、「救急特別編成部隊」が創設されました。その中の一つである「情報統括支援隊」は、大阪市消防局を含む全国9つの消防本部で運用されています。

今回は、情報統括支援隊と、創設に併せて配備された情報統括支援車について紹介します。

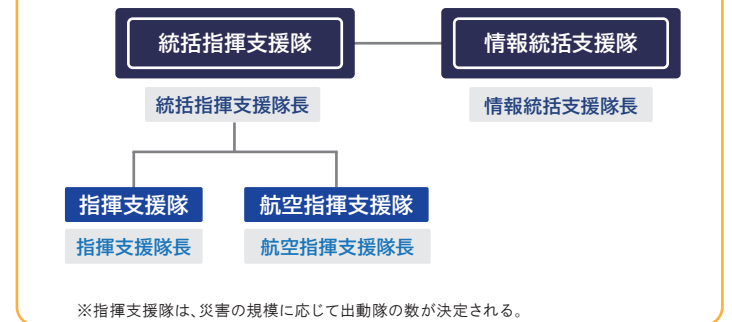
「情報統括支援隊」って？

「情報統括支援隊」は、大規模災害時に被災地で活動する「緊急消防援助隊」にかかる指揮が円滑に行われるように支援活動を行うことを任務とする「指揮支援部隊」を構成する隊の一つです。

DX資器材を活用し、現場の映像や位置情報などをリアルタイムで収集・整理・共有します。さらに、指揮判断に必要な情報を速やかに取りまとめることで、指揮支援体制の強化を図ることを目的としています。

指揮支援部隊

ヘリコプター等で迅速に現地に展開し、被災状況の把握、消防庁との連絡調整、現地消防機関の指揮支援を行う。



被災地での任務は？

緊急消防援助隊の活動では、無線などによる音声連絡を中心に情報の伝達・共有を行っています。その中で、指揮支援部隊に集約される多くの情報や被災状況を迅速かつ正確に把握し、的確な指揮判断へ反映させることが求められます。

情報統括支援隊は、無線等のアナログ手法に加え、デジタル作戦卓などのデジタルツールを用いて、リアルタイムの災害現場映像、災害情報を収集、分析及び管理を行い、指揮本部長を補佐します。

出動体制

情報統括支援隊は、大規模災害時に消防庁長官の出動の求め又は指示後、おおむね1時間以内に陸路で調整本部(被災地都道府県庁舎に設置)に向け出動します。(統括指揮支援隊はヘリコプターで出動。)

派遣職員は、指令情報センターの職員を中心とする司令課職員で構成されます。

活動例

出動

調整本部に向け情報統括支援車で出動

被災地へ 進行中 (車内)

- ・ノートパソコン及びタブレット端末を用いて、消防庁や消防局後方支援本部等と連携し、情報の収集。
- ・通行止め等の道路状況及び被災地消防本部の活動状況や被災地の情報等を把握。

調整本部到着

被災地 都道府県庁舎 到着初期

- ・デジタル作戦卓等を調整本部へ搬入し、設置。
- ・ヘリコプター、ドローン及びタブレット等により撮影した動画や写真を収集。リアルタイムで情報を共有し、災害現場の被害状況を詳細に把握。
- ・共通で使用できる災害現場活動地図(グリッドマップ等)を作成し、共有。

活動の報告

統括指揮支援隊と協力し、WEB会議を実施し、活動日報を消防庁へ報告



様々な事案から災害活動を振り返る

北方面隊

木造住宅における火災救助事案について

■はじめに

安全を確保しつつ迅速に要救助者を発見・救出し、焼損を最小限に抑えることができた火災事案を紹介する。

本火災は類焼がなく規模としては比較的小さい。一方で、濃煙により室内の視界が確保できず、現場は狭険で活動が困難であった。そのような状況下で、救助隊と消火隊が連携し、安全管理体制を強化しながら、2隊協働で被害の拡大を防止するとともに、要救助者の検索から救出までを完遂した奏功事例である。また、指揮班は早期に現場へ到着し、災害情報を的確に収集した上で即報を実施しており模範的な対応であった。

■火災概要

覚知時間	20時09分
第一出場	20時10分
放水開始時間	20時15分
要救助者発見時間	20時22分
救出完了時間	20時25分
鎮圧時間	20時36分
鎮火時間	22時25分
建物構造	木造瓦葺葺2階建 1棟2住宅 (建120㎡/延210㎡)
焼損程度	2階10㎡焼損
負傷者	1名(77歳男性・火元住民)
負傷程度	重症(両下肢Ⅲ度熱傷・気道熱傷疑い)

■現場活動

火元建物は1階が事業所であり、近隣者から「通常は1名が就業している」との情報を取った。指揮者はこの人的情報を警防本部へ速やかに報告し、出場中の各隊に「12マル」扱いとして周知した。人的情報を踏まえ、A隊およびB隊は放水体制を整えたうえで、火元正面から屋内進入を開始した。消火隊の筒先配備位置は検索を安全に実施でき、かつ活動の支障とならない場所を救助隊と連携して選定した。進入時点では、2階の約5㎡が燃焼していた。また、2階へ至る階段は狭く、夜間であったことに加え、煙中での活動となったため、現場環境は極めて不良であった。



2階室内



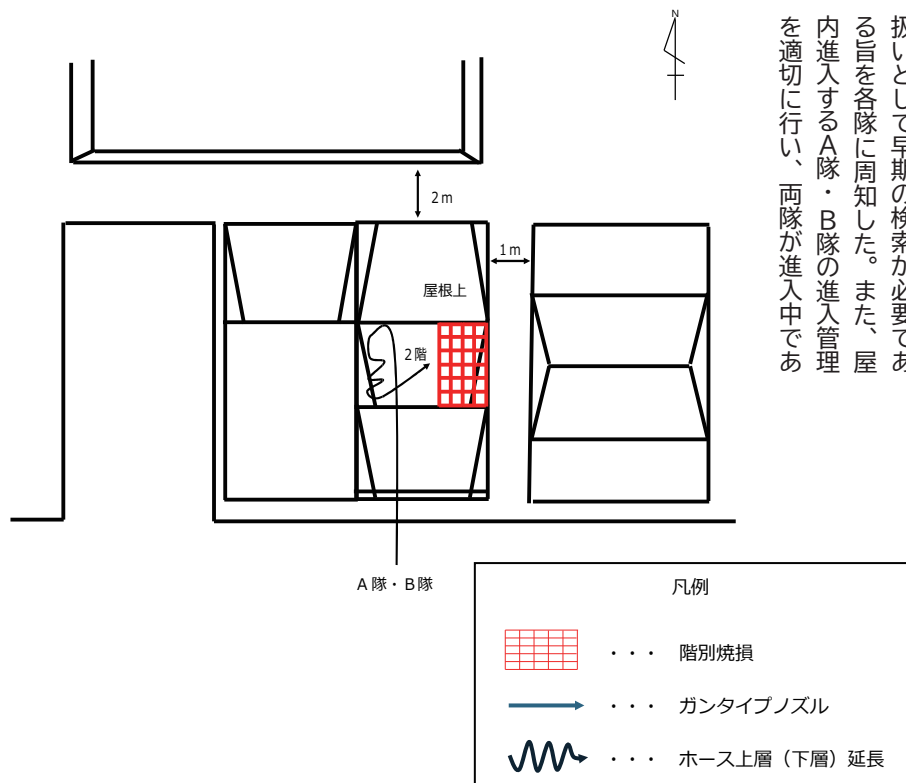
火元建物

A隊・B隊が2階で検索を実施したところ、かすかなうなり声のような音を確認した。検索を継続し、布団上で腹臥位となっている要救助者を発見した。

A隊は要救助者にレスクマスクを迅速に装着し、2階居室から1階まで抱え搬送で救出した。進入開口部から要救助者までの距離は約3mであったが、2階は熱気が強く、狭険で内在品も多い状況下での救出であった。迅速かつ的確な救出により要救助者を2階から搬出したのち、B隊が消火を実施し、鎮圧に至った。

指揮班は、第1出場指令から6分後に指揮宣言を行い、その時点で災害点、火元の構造・用途、燃焼程度、延焼危険方向など、初期情報として必要な事項を早期に即報した。人的情報は近隣者からの情報のみであったが、「12マル」扱いとして早期の検索が必要である旨を各隊に周知した。また、屋内進入するA隊・B隊の進入管理を適切に行い、両隊が進入中であ

ることも警防本部へ即報した。あわせて、増強の要否判断に必要な情報や、救出した救助者に関する情報を的確に収集して本部へ報告し、その後、方面隊が指揮系への通信一元化を実施した。



■活動のポイント

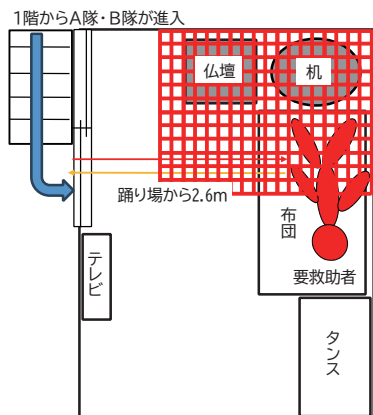
① 救助隊・消火隊の連携

近隣住民からの人的情報を収集し、放水体制を整えたうえで、活動方針を早期に決定して活動を開始した。火元の燃焼状況を的確に判断し、消火隊の援護体制を整えることで安全確保を徹底している。安全管理体制の強化が求められる中、模範的な活動を展開している。さらに、検索時の筒先配備位置についても、A隊・B隊が連携して調整した結果、安全に検索でき、かつ活動の支障とならない位置を適切に選定できている。

② 指揮班的な情報収集

本事案では、指揮班は現場に三

救出状況



番目に到着したが、災害初期から情報収集と即報を実施した。指揮宣言後、災害点、構造・用途、燃焼状況、延焼危険方向、増強の要否などの初期情報を確認し、的確に即報できている。初期情報を早期に収集して即報することとは、他の出場隊への情報提供につながり、中隊の災害対応を円滑に進めるうえで重要である。加えて、進入管理も適切に実施しており、統制の取れた活動を展開できている。

■さいごに

この事例は、あらためて情報統制の重要性が示された模範的な活動であった。各階級の指揮者は、共有された情報のもと、隊員の安全管理と進入管理を徹底した。これにより、延焼拡大が懸念される状況下でありながら、一人ひとりの隊員が安全を最優先に、確実かつ迅速な要救助者の救出と火災の鎮圧に至った。

総じて、救出から消火までのプロセスにおいて、確実性と迅速性が両立された極めて効果的な警防活動であったと評価できる。